

遺伝子問題とはなにか

ヒトゲノム計画から人間を問い直す

●青野由利 著

●四六判 306頁 ●本体2,200円 ●新曜社 (TEL03-3264-4973)



ジャーナリズムの世界でも女性が活躍する時代になった。なかでも、科学ジャーナリズムは女性にとって魅力ある舞台と言えるだろう。まだ数は少ないが、新聞での彼女らの健筆ぶりが目に付く。本書の著者もそうした一人である。大学の薬学部を卒業、新聞社に入ってから医学や生物学、天文学などを担当してきた。

ヒトゲノム計画が始まって10年余りになるが、その始まりから取材にかかわり、日本のみならず世界的なスケールで追跡、報道に当たってきた。その間、フルブライト客員研究生として渡米したり、社会人大学院生として研究生を送ったりと多忙だったが、一貫してフォローしたのが、この遺伝子問題だった。その中で学び、観察し、考えた成果をまとめたのが本書である。

ヒトゲノムの解説は、6月にクリントン大統領らが概要(ドラフト)の解説完了を発表した。壮大な計画のリーダーシップをとったアメリカでの報道ぶりは華々しいものだった。「われわれは今、生命を創造したもうた神の言葉を解説しようとしている」と彼が語ったのも誇張ではない。人間の設計図の意味が明らかになる時、その生物学、医学、農業、産業などへの影響は計り知れないものがある。病気の治療や予防は遺伝子検査の日常的な導入によって、遠からず様変わりするに違いない。そして、遺伝子から個人の未来の健康を予測できる可能性は、プライバシーの保護や倫理的な規制を必要とするだろう。その兆候は現れ出している。

本書はヒトゲノム計画の単なる解説に留まらず、遺伝子研究の急速な進展がもたらす社会的な影響にもジャーナリストの目を注いでおり、この問題に対する著者の見方を随所に述べている。日本の研究者にも取材をしているので、なぜ日本がアメリカに遅れをとったかもわかるだろう。遺伝子研究の裏面の一端を知ることができる。巻末の15ページの文献は読者にとって役立つと同時に、著者の勉強ぶりがうかがえる。

牧野 賢治 (まきの けんじ)
東京理科大学理学部教授